

一寸法師

楠山正雄

青空文庫

むかし、せつつのくに撰津国のなにわ難波という所に、ふうふ夫婦のもの者が住んでおりました。こども子供が一人も無いものですから、すみよし住吉のみょうじん明神さまに、
おまいりをしては、

「どうぞこども子供を一人おさずけくだ下さいまし。それはゆび指ほどのちい小さな子でもよろしゆうございますから。」

と一いっし生懸命けんめいにお願いねが申しました。

すると間まもなく、お上かみさんは身み持ちになりました。

「わたしどものお願ねがいがかなくなったのだ。」

と夫婦ふうふはよろこんで、子供こどもの生まれる日を、今日きょうか明日あすかと待まちかまえていました。

やがてお上かみさんは小ちいさな男あかの赤あかちゃんを生うみました。ところがそれがまた小ちいさいといつて、ほんとうに指ゆびほどの大きおほきさしかありませんでした。

「指ゆびほどの大きおほきさの子供こどもでも、と申し上あげたら、ほんとうに指ゆびだけの子供こどもを明み神かみさまが下くださった。」

と夫婦ふうふは笑わらいながら、この子供こどもをだいにじにして育そだてました。ところがこの子は、いつまでたつてもやはり指ゆびだけより大きおほくはなりませんでした。夫婦ふうふもあきらめて、その子こどもに一寸法師いっすんぼうしと名前なまえをつけました。一寸法師いっすんぼうしは五つになつても、やはり背せいがのびま

せん。七つになつても、同じことおなでした。十を越こしても、やはり一寸法師いっすんぼうしでした。一寸法師いっすんぼうしが往來おうらいを歩あるいていると、近所きんじよの子供こどもたちが集あつまつてきて、

「やあ、ちびが歩あるいている。」

「ふみ殺ころされるなよ。」

「つまんでかみつぶしてやろうか。」

「ちびやい。ちびやい。」

と口々くちぐちにいつて、からかいました。一寸法師いっすんぼうしはだまつて、
にこにこしていました。

一寸法師は十六になりました。ある日一寸法師は、おとうさんとおかあさんの前へ出て、

「どうかわたくしにお暇を下さい。」

「いいました。おとうさんはびっくりして、

「なぜそんなことをいうのだ。」

と聞きました。一寸法師はとくいらしい顔をして、

「これから京都へ上ろうと思います。」

「いいました。」

「京都へ上つてどうするつもりだ。」

「京都は天子さまのいらっしやる日本一の都ですし、おもしろ

ろいしごとがたくさんあります。わたくしはそこへ行つて、運だめしをしてみようと**おも**います。」

そう聞くとおとうさんはうなずいて、

「よしよし、それなら行つておいで。」

と許して下さいました。

一寸法師は大へんよろこんで、さつそく旅の支度にかかりました。まずおかあさんにぬい針を一本頂いて、麦わらで柄とさやをこしらえて、刀にして腰にさしました。それから新しいおわんのお舟に、新しいおはしのかいを添えて、住吉の浜から舟出をしました。おとうさんとおかあさんは浜べまで見送りに立つて下さいました。

「おとうさん、おかあさん、では行つてまいります。」

と一寸法師がいつて、舟をこぎ出しますと、おとうさんとお

かあさんは、

「どうか達者で、出世をしておくれ。」

といいました。

「ええ、きつと出世をいたします。」

と、一寸法師はこたえました。

おわんの舟は毎日少しずつ淀川を上つて行きました。しか

し舟が小さいので、少し風が強く吹いたり、雨が降つて水かさが

増したりすると、舟はたびたびひっくり返りそうになりました。

そういう時には、しかたがないので、石垣の間や、橋ぐいの陰

に舟を止めて休みました。

こんな風にして、一月もかかって、やつとのことで、京都に近い鳥羽という所に着きました。鳥羽で舟から岸に上がると、もうすぐそこは京都の町でした。五条、四条、三、二、一条と、にぎやかな町がつづいて、ひっきりなしに馬や車が通つて、おびただしい人が出ていました。

「なるほど京都は日本一の都だけあつて、にぎやかなものだなあ。」

と、一寸法師は往来の人の下駄の齒をよけて歩きながら、しきりに感心していました。

二三 条まで来ると、たくさんりっぱなお屋敷が立ち並んだ中

に、いちばん目にたつてりつばな門構えのお屋敷がありました。
一寸法師は、

「なんでも出世をするには、まずだれかえらい人の家来になつて、それからだんだんにし上げなければならぬ。これこそいちばんえらい人のお屋敷に違ひない。」

と思つて、のこの門の中に入つていきました。広い砂利道をさんざん歩いて、大きな玄関の前に立ちました。なるほどここは三条の宰相殿といつて、羽ぶりのいい大臣のお屋敷でした。

そのとき一寸法師は、ありつたけの大きな声で、

「ごめん下さい。」

とどなりました。でも聞きこえないとみえて、だれも出てくるものがないので、こんどはいつそう大きな声こえを出だして、

「ごめん下ください。」

とどなりました。

三度どめに一寸いっすん法師ほうしが、

「ごめん下ください。」

とどなった時とき、ちようどどこかへおでましになるつもりで、玄げん関かんまでおいでになった宰相さいしやう殿どのが、その声こえを聞ききつけて、出てごらんになりました。しかしだれも玄関げんかんには居いませんでした。ふしぎに思おもってそこらをお見回みまわしになりますと、靴くつぬぎにそろえてある足駄あしだの陰かげに、豆粒まめつぶのような男おとこが一人ひとり、反そり身みになつてつ

つ立つていました。宰相殿はびっくりして、

「お前か、今呼んだのは。」

「はい、わたくしでございます。」

「お前は何者だ。」

「難波からまいりました一寸法師でございます。」

「なるほど一寸法師に違いない。それでわたしの屋敷に来たのは何の用だ。」

「わたくしは出世がしたいと思つて、京都へわざわざ上つてまいりました。どうぞ一生懸命働きますから、お屋敷でお使いなさつて下さいまし。」

一寸法師はこういつて、ぴよこんとおじぎをしました。宰相

相ようどの殿のは笑わらいながら、

「おもしろい小僧こぞうだ。よしよし使つかつてやろう。」

とおつしやつて、そのままお屋敷やしきに置おいておやりになりました。

三

一寸いっすんぼうし法師は宰相さいし殿ようどののお屋敷やしきに使つかわれるようになってから、
からだ体ちいこそ小ちいさくても、まめまめしくよく働はたらきました。大たいへん利り口こうで、

気きが利きいているものですから、みんなから、

「一寸いっすんぼうし法師は、一寸いっすんぼうし法師は。」

といて、かわいがられました。

このお屋敷やしきに十三になるかわいらしいお姫さまひめがありました。
一寸法師いっすんぼうしはこのお姫さまひめが大好きだいすきでした。お姫さまひめも一寸法師いっすんぼうしが大たいそうお氣きに入りいりで、どこへお出いかけになるにも、

「一寸法師いっすんぼうしや。一寸法師いっすんぼうしや。」

といつて、お供ともにお連つれになりました。だんだん仲なかがよくなるうち、何なんといつても二人ふたりとも子供こどもだものですから、いつかお友ともだ達ちのようになつて、時々ときどきはけんかをしたり、いたづらをし合あつて、泣ないたり笑わらつたりすることもありました。ある時ときまたけんかをして、一寸法師いっすんぼうしが負まけました。くやしきまぎれに一寸法師いっすんぼうしは、そつとお姫さまひめが昼寝ひるねをしておいでになるすきをうかがつて、自分じぶんが殿さまとのから頂いただいたお菓子かしを残のこらず食たべてしまつて、残のこつた

粉をお姫さまの眠っている口のはたになすりつけておきました。そして自分ばかりっぽになったお菓子の袋を手にとって、お庭の真ん中に出て、わざと大きな声でおいおい泣いておりました。その声を聞きつけて、殿さまが縁側へ出ていらしって、「一寸法師、どうした。どうした。」

とお聞きになりました。

すると一寸法師は、さも悲しそうな声をして、

「お姫さまがわたくしをぶって、殿さまから頂いたお菓子をみんな取って食べておしまいになりました。」

といいました。

殿さまはびっくりして、お姫さまのお部屋へ行ってごらんにな

りますと、お姫さまは口のはたにいつぱいお菓子かしの粉こなをつけて、眠ねむつておいでになりました。

殿とのさまは大たいそうおおこりになつて、おかあさんあさんを呼よんで、

「何なんだつて、姫ひめにあんな行儀ぎようぎの悪いわるまねをさせるのだ。」

ときびしくおしかりになりました。するとこのおかあさんは、

少すこしいじの悪いわる人ひとだつたものですから、お姫ひめさまのために自分じぶんが

しかられたのを大たいそうくやしがりしました。そしてくやしませぎれに、

ありもしないことをいろいろとこしらえて、お姫ひめさまが平へい生せい大だい

臣いじんのお娘むすめに似にあ合あわず、行儀ぎようぎの悪いわることをさんざんに並ならべて、

「いくら止とめても、ばかにしていうことをちつとも聴きかないので

す。」

とおいいつけになりました。

さいしよどの

宰相殿

はななおなおおこりになって、一寸法師にいいつ

けて、お姫さまをお屋敷から追い出して、どこか遠い所へ捨てさ

せました。

いっすんぼうし

一寸法師はとんだことをいい出して、お姫さまが追い出され

るようになったので、すっかり気の毒になつてしまいました。そ

こでどこまでもお姫さまのお供をして行くつもりで、まず難波の

おとうさんのうちへお連れしようと思つて、鳥羽から舟に乗りま

した。すると間もなく、ひどいしけになつて、舟はずんずん川を

下つて海の方へ流されました。それから風のまにまに吹き流され

て、とうとう三日三晩波の上で暮らして、四日めに一つの島に着

きました。

その島には今まで話に聞いたこともないようなふしぎな花や木がたくさんあつて、いったい人が住んでいるのかいないのか、いっとうに人らしいものの姿は見えませんでした。

一寸法師はお姫さまを連れて島に上がつて、きよろきよろしながら歩いて行きますと、いっとうどこから出てきたともなく、二匹の鬼がそこへひよつこり飛び出してきました。そしていきなりお姫さまにとびかかつて、ただ一口に食べようと思いました。お姫さまはびつくりして、気が遠くなつてしまいました。それを見ると、一寸法師は、例のぬい針の刀をきらりと引き抜いて、ぴよこんと鬼の前へ飛んで出ました。そしてありつたけの大きな声を

振り立てて、

「これこれ、このお方をだれだと思おう。三条の宰相殿の姫君だぞ。うっかり失礼なまねをすると、この一寸法師が承知しないぞ。」

とどなりました。二匹の鬼はこの声に驚いて、よく見ますと、足もとに豆つ粒のような小男が、いばり返つて、つつ立っていました。鬼はからからと笑いました。

「何だ。こんな豆つ粒か。めんどうくさい、のんでしまえ。」
 というが早い、一匹の鬼は、一寸法師をつまみ上げて、ぱつくり一口にのんでしまいました。一寸法師は刀を持ったまま、するすると鬼のおなかの中へすべり込んでいきました。入る

とおなかの中をやたらにかけずり回りながら、ちくりちくりと刀でついで回りまわりました。鬼は苦しがつて、

「あツ、いたい。あツ、いたい。こりやたまらん。」

と地びたをころげ回りました。そして苦しまぎれにかつと息をするはずみに、一寸法師はまたぴよこりと口から外へ飛び出しました。そして刀を振り上げて、また鬼に切つてかかりました。するともう一匹の鬼が、

「生意気なちびだ。」

といつて、また一寸法師をつかまえて、あんどりのんでしまいました。のまれながら一寸法師は、こんどはすばやく躍り上がつて、のどの穴から鼻の穴へ抜けて、それから眼のうしろへは

い上^あがつて、さんざん鬼^{おに}の目玉^{めだま}をつつつきました。すると鬼^{おに}は思^{おも}わず、

「いたい。」

ときけんで、飛^とび上^あがったはずみに、一寸法師^{いっすんぼうし}は、目^めの中^{なか}からひよいと地^じびたに飛^とび下^おりました。鬼^{おに}は目玉^{めだま}が抜^ぬけ出^だしたかと思^{おも}つて、びつくりして、

「大^{たい}へん、大^{たい}へん。」

と、後^{あと}をも見^みずに逃^にげ出^だしました。するともう一匹^{びき}の鬼^{おに}も、「こりやかなわん。逃^にげろ、逃^にげろ。」

と後^{あと}を追^おつて行^いきました。

「はッは、弱^{よわむし}虫^{むし}め。」

と、一寸法師は、逃げて行く鬼のうしろ姿を気味よさそうにながめて、

「やれやれ、とんだことでした。」

といいながら、そこに倒れているお姫さまを抱き起こして、しんせつに介抱しました。お姫さまがすっかり正気がついて、立ち上がろうとしますと、すそからころころと小さな槌がころげ落ちました。

「おや、ここにこんなものが。」

と、お姫さまがそれを拾ってお見せになりました。

一寸法師はその槌を手にとって、

「これは鬼の忘れて行った打ち出の小槌です。これを振れば、何

でもほしいと思うものが出てきます。ごらんなさい、今ここでわたしの背を打ち出してお目にかけてますから。」

こういつて、一寸法師は、打ち出の小槌を振り上げて、一寸法師よ、大きくなれ。あたり前の背になれ。」

といいながら、一度振りますと背が一尺のび、二度振りますと三尺のび、三度めには六尺に近いりっぱな大男になりました。お姫さまはそのたんびに目をまるくして、

「まあ、まあ。」

といつておいでになりました。

一寸法師は大きくなつたので、もううれしくつてうれしくつて、立ったりしやがんだり、うしろを振り向いたり、前を見たり、

自分で自分の体をめずらしそうにながめていましたが、一ひと通りながめてしまうと、急きゆうに三日三晩みつかみばんなんにも食たべないで、おなかのへつていることを思おもい出だしました。そこでさつそく打うち出での小槌こづちを振ふつて、そこへ食たべきれないほどのごちそうを振ふり出だして、お姫ひめさまと二人ふたりで仲なかよく食たべました。

ごちそうを食たべてしまうと、こんどは金銀きんぎん、さんご、るり、めのうと、いろいろの宝たからを打うち出だしました。そしていちばんおしまいまいに、大きな舟ふねを打うち出だして、宝物たからものを残のこらずに積つみ込こんで、お姫ひめさまと二人ふたり、また舟ふねに乗のつて、間まもなく日に本っぽんの国くにへ帰かえつて来きました。

四

一寸法師が宰相殿のお姫さまを連れて、鬼が島から宝
 物を取つて、めでたく帰つて来たというわさが、すぐと世間
 にひろまつて、やがて天子さまのお耳にまで入りました。

そこで天子さまは、ある時、一寸法師をお召しになつてごら
 んになりますと、なるほど気高い様子をしたりつぱな若者でし
 たから、これはただ者ではあるまいと、よくよく先祖をお調べさ
 せになりました。それで一寸法師のおじいさんが、堀河の中
 納言というえらい人で、むじつの罪で田舎に追われて出来た子
 が、一寸法師のおとうさんで、それからおかあさんという人も、

やはりもとは伏見ふしみの少将しょうしょうといった、これもえらい人の種たねだといふことが分わかりました。

天子てんしさまはさつそく、一寸法師いっすんぼうしに位くらをおさずけになつて、堀ほ

河りかわの少将しょうしょうとお呼よばせになりました。堀河ほりかわの少将しょうしょうは、

改あらためて三條宰相さんじょうさいし殿どののお許ゆるしをうけて、お姫ひめさまをお嫁よめさん

にもらいました。そして摂津せつづ国くにの難波なにわから、おとうさんやおか

あさんをお呼よび寄よせて、うち中じゆうがみんな集あつまつて、楽たのしく世よの中を

送おくりました。

青空文庫情報

底本：「日本の古典童話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2006年7月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一寸法師

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>